

多賀城市文化財調査報告書 第33集

年報 6

平成 3 年度

平成 5 年 3 月

多賀城市埋蔵文化財調査センター

序

昭和62年4月に開館した多賀城市文化センターは、市民会館、中央公民館、埋蔵文化財調査センターの三つの施設が複合し、市民の芸術文化活動の拠点として、それぞれの特徴を生かした活動を行ってきています。特に平成3年度は開館5周年にあたり、古代多賀城の歴史を題材とした市民ミュージカル「タムラ〇伝」^{マス}も開催されました。このように本市のもつ誇りうる歴史が、市民をはじめとする多くの方々に身近なものとして受け入れられ、これによって文化財に対する認識も深まることは、文化財保護の立場に立つ者としてまことに喜ばしい限りです。

さて、文化財保護意識の普及、啓蒙をはかるという役割を担う当埋蔵文化財調査センターのもう一つの大きな仕事として、市内の遺跡の発掘調査を行い、本市の歴史を解明するということがあげられます。当センターでは毎年多くの場所で調査を行っており、この年報中でとりあつかった平成3年度も、7件の発掘調査と3件の試掘調査を実施しました。これらの調査では、近年大きな注目を集めている国府多賀城周辺における平安時代の計画的な街並みの様子を具体的に探るための資料が次々と得られました。また奈良・平安時代だけでなく、それ以前の古墳時代の人々の生活の跡がまとまって発見されたのも平成3年度の大きな成果の一つです。

次に展示の面では、前年度に実施した発掘調査の成果を速く紹介する速報展と第5回企画展を開催しました。前者では「國守の館」と推定される山王千刈田遺跡から発見された「右大臣殿 錢馬收文」と書かれた木簡や、山王遺跡第10次調査で発見された戸口損益帳、具注暦等の漆紙文書を、手づくりの復製品や復元図を交えてわかりやすく展示しました。後者では「中世の多賀城—国府の地に生きた武士(もののふ)たちー」と題して、武士の屋敷跡が隣接して発見された新田遺跡の調査成果を中心とした展示を行いました。ここでは発掘調査で出土した当時の人々の日常道具を数多く展示して、今まで文献史料から語られることが多かった中世の社会を、「モノ」を通してより具体的に理解してもらうために多くの工夫を施したつもりです。

以上のように、平成3年度は各事業でそれぞれ見るべき成果をあげることができました。しかしながら、公共事業や宅地造成等の開発件数が増加する一方の本市では、これに対して発掘調査等のすみやかな対応ができなくなってきたのが近年の状況です。また、どうしても発掘調査が主体とならざるを得ない当センターでは、企画展等に充分な準備期間がとれなかったり、P.R.が不足がちになるといった問題も生じてきています。今後、こういった問題をより良い方向に向かわせるために、職員一同これまで以上の努力をはらう所存でありますので、関係機関の皆様方の変わらぬご指導とご協力をよろしくお願い申し上げます。

平成5年3月

多賀城市埋蔵文化財調査センター

所長 斎藤一司

例　　言

1. 本書は、多賀城市埋蔵文化財調査センターが平成3年度に行った埋蔵文化財の調査報告と各種事業について、概略的にまとめたものである。
2. 本書のうち、Ⅰ章の調査報告については、各調査終了時に担当者がまとめた調査成果の概要報告書をもとにした。またⅡ章の展示関係の報告については、当センター展示解説員が執筆した。そして、これらを各職員の協力を得て今年度の年報作成担当が加筆、編集した。

本　文　目　次

序 文	
例 言	
I 調査報告	1
1. 山王遺跡第13次調査	3
2. 山王遺跡第14次調査	6
3. 八幡沖遺跡試掘調査	7
4. 橋本団貝塚試掘調査	9
5. 市川橋遺跡試掘調査	11
II 事業報告	13
1. 展 示	13
2. 普及活動	19
III 事務報告	20

I 調査報告

平成3年度に当センターが実施した発掘調査の一覧は、下表のとおりである。

番	遺跡名	所在地	調査期間	調査面積	原因	担当職員
1	山王遺跡(第12次)	多賀城市南宮字八幡地内	平成3年4月15日～12月26日	6,250m ²	仙塙道路建設	千葉
2	山王遺跡(第13次)	・ 山王字山王三区6号外	4月22日～6月30日	523m ²	東村置場、事務所建設	滝口、石川
3	山王遺跡(第14次)	・ 南宮字八幡170	6月3日～7月23日	225m ²	中学校敷地、道場建設	滝口
4	山王遺跡(第15次)	・ 南宮字八幡149-1	7月1日～9月24日	205m ²	一般住宅建設	石川
5	山王遺跡(第16次)	・ 山王字山王三区57-2外	9月11日～11月21日	430m ²	・	石川、相沢
6	高崎遺跡(第8次)	・ 高崎二丁目85-1外	4月22日～7月26日	400m ²	ガソリンスタンド建設	石本、相沢
7	新田遺跡(第12次)	・ 新田字後87-1外	8月19日 ～平成4年1月31日	1,940m ²	宅地造成	滝口
8	八幡沖遺跡(試掘)	・ 宮内一丁目1542	5月20日～5月31日	180m ²	・	石川
9	橋本圓貝塚()	・ 大代五丁目54-6	7月29日～8月2日	340m ²	住宅兼店舗建設	相沢
10	市川橋遺跡()	・ 高崎字野の口65-1外	12月4日～12月19日	240m ²	宅地造成	石本

平成3年度調査一覧表

本書では、これらのうち山王遺跡第13・14次調査、八幡沖遺跡・橋本圓貝塚・市川橋遺跡試掘調査の5箇所をとりあげる。なお、このほかの調査については、別に調査報告書を刊行しているので、以下に調査成果の簡単なまとめのみ記載することにする。

山王遺跡第12次調査（多賀城市文化財調査報告書第30集）

仙塙道路建設に伴う調査で、平成元年度から継続して実施している。今年度は古墳時代中期の竪穴住居跡を多く検出したほか、奈良時代の堀跡と思われる材木列跡や平安時代の道路跡、掘立柱建物跡、井戸跡等を検出している。このうち道路跡は、国府多賀城跡の南面地域で実施されていた一町（約109m）を基本単位とした方格の地割りの区画をなす遺構で、すでにいくつかの調査区で同様の道路跡が発見されている。本調査区では東西道路と南北道路の交差点部分も検出している。

山王遺跡第15次調査（多賀城市文化財調査報告書第29集）

「國守の館」と考えられる遺構を発見した山王千刈田遺跡（山王遺跡第9次調査）の関連調査として実施した。調査の目的は、多賀城跡周辺地域にみられる地割り等の土地利用の状況を具体的に解明し、そこから「國守の館」の敷地範囲を導き出すことに主眼をおいた。本調査区は前述の仙塙道路関連調査区の西側に隣接し、調査の結果すでに確認されている東西道路の西侧の延長部分を検出した。さらに、その道路とT字状に接続して南へ延びる南北道路跡を検出

した。しかし、調査区が限られていたことから、これに統くと思われる北側の南北道路跡等の確認はできなかった。

山王遺跡第16次調査（多賀城市文化財調査報告書第29集）

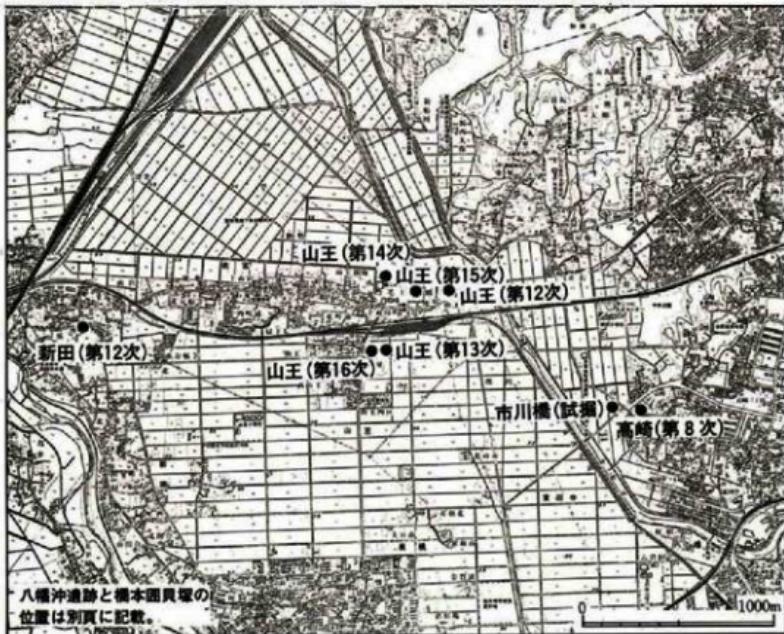
第15次調査と同様の目的で実施した。調査の結果、平安時代の遺構として2間×2間の倉庫跡2棟と南北3間×東西2間以上の大規模な建物跡1棟を検出した。また、この建物跡に先行する小溝群（細跡）を検出した。

高崎遺跡第8次調査（多賀城市文化財調査報告書第31集）

多賀城廢寺の南西約600mの地点で調査を実施した。調査の結果、平安時代の掘立柱建物跡、井戸跡、道路跡、水田跡等を検出し、この時代の集落構成のあり方の一端をうかがい知ることができた。

新田遺跡第12次調査（多賀城市文化財調査報告書第32集）

調査地点は本市の北西部にあたり、隣接する仙台市との境界付近に位置する。調査の結果、等間隔で平行して延びる小溝跡の、いくつかのまとまりを検出した。これらは平安時代に属し、土壤分析の結果この地で稻作が行われていた可能性が高いことが指摘された。



調査区位置図

1. 山王遺跡第13次調査

- (1) 所在地 多賀城市山王字山王三区62番1外
- (2) 調査期間 平成3年4月22日～6月30日
- (3) 調査面積 523m²



調査区位置図

(4) 調査についての概要

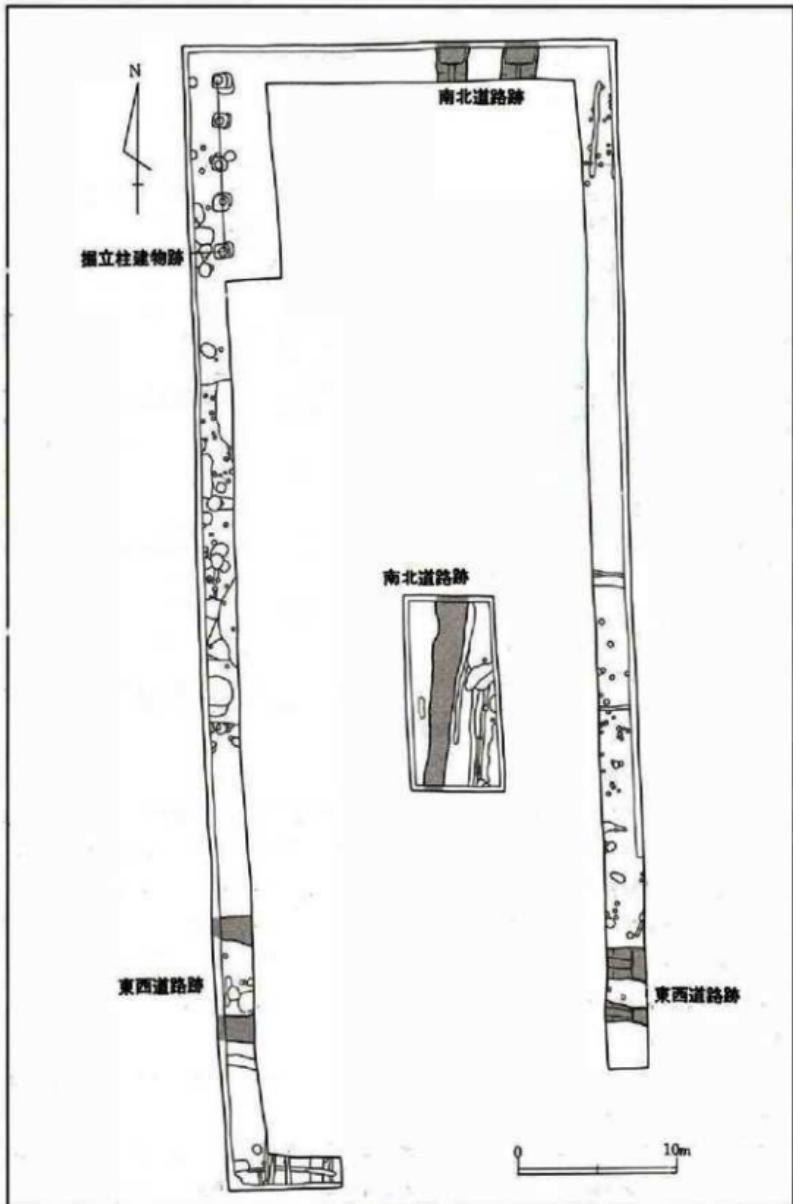
山王遺跡は、古墳時代から近世にかけての大規模な集落跡である。旧七北田川と砂押川によって形成された自然堤防上に立地しており、その範囲は、東西約2km、南北約1kmに及ぶ。今回の中調査区は、遺跡範囲のほぼ中央にあたり、現況は標高約4.3mの水田である。

本調査は、当該地が建設会社の資材置場に使用されることから、周囲で行う土留工事の基礎範囲と簡易な事務所が設置される箇所に調査区を設定した。調査にあたっては、工事による遺構面への影響が軽微であるため、基本的には遺構の確認だけにとどめた。

(5) 調査のまとめ

今回の調査で検出された遺構は、掘立柱建物跡1棟、道路跡2条、溝跡14条、土塁4基、水田跡、柱穴多数である。

このうち道路跡は、調査区北側で南北道路跡、調査区東側及び西側で東西道路跡が各1条検出されている。南北道路跡についてみると、路面上で確認した10世紀前半に陥下したとされる



調査区全体図

灰白色火山灰の堆積状況より、少なくとも新旧2時期の変遷があつたことを確認した。また、本調査区の北側約100mの位置を、山王遺跡第4・8次調査で検出された路幅約12mの東西道路跡が走っていると推定されるが、今回検出の南北道路跡はそれと交差すると考えられる。さらに東西道路跡については、それより1本南側を走るものと考えられ、これにより12m道路の南側にも、近年国府多賀城周辺で確認された方格地割りが存在することが始めて明らかになった。

掘立柱建物跡は、調査区北西隅で検出したもので、一辺1mを越える大規模な柱穴を南北



南北道路跡（北東側より）



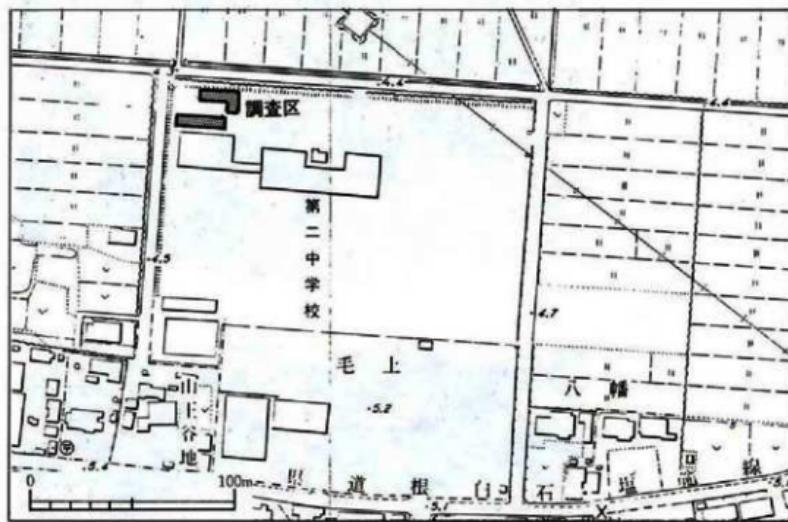
掘立柱建物跡（北側より）

北4間分確認した。全容については、西側の延びが調査区外に及んでいるため不明である。なお、調査区西壁の断面観察の結果、柱穴と同一規模の落ち込みを2箇所で確認している。これらは検出位置や埋土の状況からみて、建物跡に伴う柱穴と考えられ、その配置より本建物跡は附付建物跡か、もしくは縦柱建物跡と推定される。

遺物は、土師器、須恵器、赤焼き土器が主体を占め、灰釉陶器、綠釉陶器も若干出土している。その他、瓦、屋字瓦、砥石、刀子、鉄滓、土錘等がある。

2. 山王遺跡第14次調査

- (1) 所在地 多賀城市南宮字八幡170
(2) 調査期間 平成3年6月3日～7月23日
(3) 調査面積 225m²



調査区位置図

(4) 調査についての概要

当該地は、東西に長い山王遺跡範囲の北端ほぼ中央に位置し、これまで数多くの調査が実施されている山王遺跡の中では、比較的調査の手が加わっていない地域にある。過去に一番近い場所で実施された調査では、東側約150mの位置で昭和62年に公共下水道工事に伴う調査が実施されている。この時には、3m×3mのトレンチ内で溝跡等が重複して検出されている。

今回の調査は、多賀城市立第二中学校の柔剣道場建設に伴うもので、調査においては建物基礎の設置箇所に2本の細長いトレンチを設定した。なお、調査区内には約2mの厚さで盛土がなされていた。

(5) 調査のまとめ

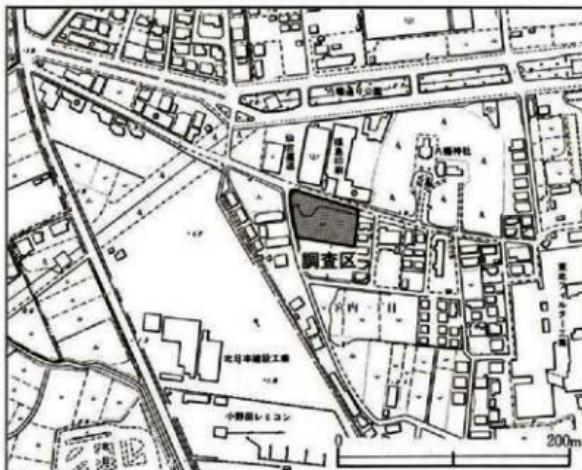
調査では南側に設定したトレンチにおいて、2本の小規模な溝状の落ち込みを検出した。これらは部分的な確認であり、遺物も出土していないため年代や性格等は不明である。このほか、明確な遺構と判断できるものは検出されなかった。また、調査全体を通しての遺物も、第Ⅰ層（旧水田耕作土）から須恵器壺の破片が1点出土しただけである。

3. 八幡沖遺跡試掘調査

- (1) 所 在 地 多賀城市宮内一丁目154番2
- (2) 調 査 期 間 平成3年5月20日～5月31日
- (3) 調 査 面 積 180m²
- (4) 調査についての概要

八幡沖遺跡は、多賀城市的南東部に位置し、仙台湾によって形成された標高約2mの自然の浜堤上に立地している。本遺跡は、古くから奈良・平安時代の土師器、須恵器の散布地として知られていたが、これまで本格的な調査は実施されていない。わずかに、昭和62年に本調査区の南東側の近接地において、試掘調査が実施されている。この調査では、溝跡1条を検出しているが、年代等は不明であった。また、遺物は赤焼き土器の破片等がわずかに出土している。

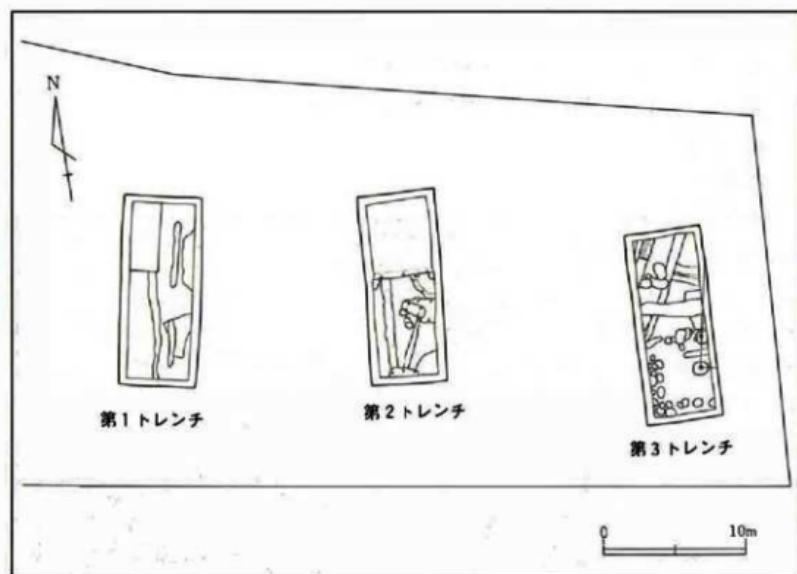
今回の調査は、共同住宅建設に伴う試掘調査である。調査にあたっては、当該地に6×15mの南北に長い3本のトレンチを設定し、



調査区位置図



第3トレンチ遺構検出状況（南側より）



調査区全体図

西側から順に1～3の番号をつけた。なお調査区内には、全域に60～90cmの盛土がなされ、また後世の擾乱が造構面にまで達っている箇所も認められた。

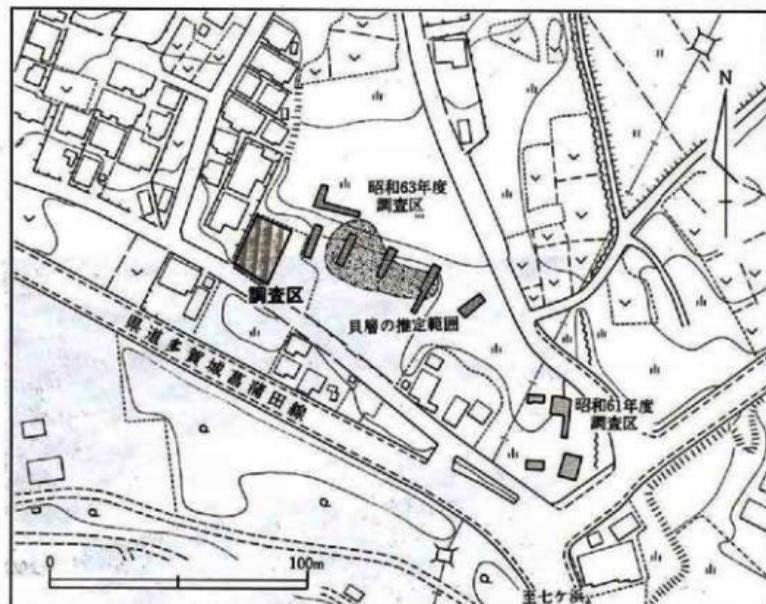
(5) 調査のまとめ

今回の調査で検出した造構は、掘立柱建物跡1棟、溝跡10条、その他柱穴を含むピット多数である。造構の分布は当該地の東側ほど多くなり、特に第3トレーナーでは、掘立柱建物跡をはじめとする多くの造構が重複する。このうち、建物跡はトレーナー東壁沿いで2個の柱穴を確認したもので、さらに東側に延びる様相を示している。柱穴はほぼ円形を呈し、径70～90cmを計る。また径約20cmの柱痕跡も確認している。遺物は、この建物跡と一部掘り込みを行った溝跡から赤焼き土器杯が出土している。このことから、本調査区検出の造構はおおむね平安時代に属すると考えられる。

4. 橋本団貝塚試掘調査

- (1) 所 在 地 多賀城市大代五丁目54番6
- (2) 調 査 期 間 平成3年7月29日～8月2日
- (3) 調 査 面 積 340m²
- (4) 調査についての概要

橋本団貝塚は、多賀城市的南東端に位置し、松島丘陵に属する小丘陵の突端部に立地する。本遺跡は、大正8年に調査が行われ、ハマグリ、カキを主体とする数枚の貝層が検出されている。その後、長く調査の手は加わらなかったが、近年になり本調査区の東側で2回の試掘調査が実施されている。このうち、昭和61年の調査では遺構、遺物等は検出されなかったが、昭和63年の調査では表土下約70cmの地点で貝層を検出し、その範囲が東西約45m、南北約25mに及ぶと推定できた。この調査で出土した土器類には製瓶土器と縄文土器があり、量的には前者が多い。縄文土器は深鉢が主体であり、他に浅鉢、壺等がみられ、その特徴から縄文時代晚期のものと考えられる。自然遺物ではハマグリ、マガキが圧倒的に多く、このほかアサリ、イシダタミガイ、イガイ、オキシジミガイ、ヤマトシジミガイ、クボガイ、スガイ、ナミマガシガイ、



調査区位置図

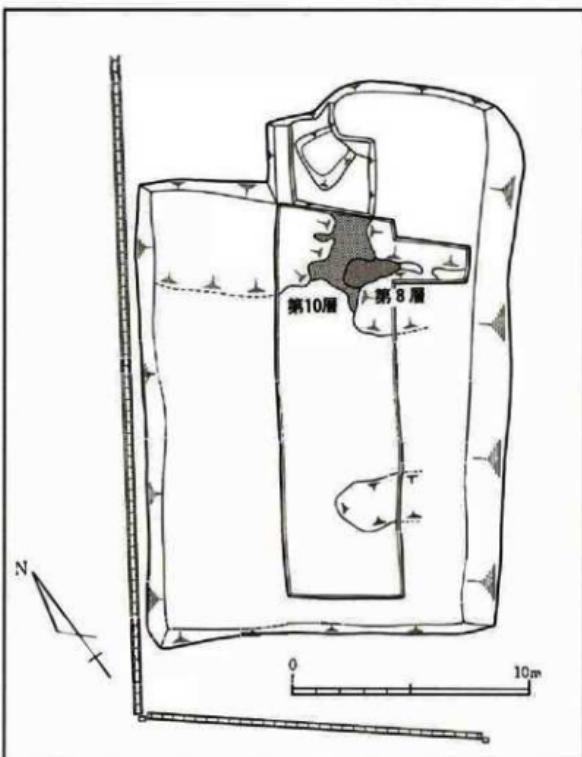
アワビ等がある。また、角や骨等も若干ではあるが出土している。

今回の調査は、住宅兼店舗建設に伴う試掘調査で、主に貝層の範囲が当該地まで及んでいるかを調べる目的で実施した。

(5) 調査のまとめ

調査の結果、貝層及びこれに間連する遺構は検出されなかった。しかし、調査区内で確認された第11層までの土層のうち、北端に分布する第2～5層から製塙土器と貝殻片が、第8層と第10層から縄文土器（晩期）、石器が出土している。このこ

とから、本調査区の東側に主体をおく貝塙本体とほぼ同時期の土層が、本調査区北端まで及んでいることが判明した。



調査区全体図



調査区全景
(北東側より)

5. 市川橋遺跡試掘調査

- (1) 所 在 地 多賀城市高崎字堤の口65番1外
- (2) 調 査 期 間 平成3年12月4日～12月19日
- (3) 調 査 面 積 240m²
- (4) 調査についての概要

市川橋遺跡は、多賀城市内を南北にほぼ二分して流れる砂押川によって形成された自然堤防上に立地している。本遺跡は特別史跡多賀城跡に接し、その西側と南側一帯の水田部に南北約1.6km、東西約1.4kmの広範囲にわたって占地している。これまで小規模ながら数多くの地点で発掘調査が実施されており、平安時代を中心とする建物跡、井戸跡、溝跡、道路跡、水田跡等の多くの遺構や豊富な遺物が発見されている。

今回の調査は、分譲住宅造成に伴う試掘調査である。調査区は遺跡範囲の南端部にあたり、現況は標高約3.2mの水田である。調査にあたっては、はじめに3m×6mのトレーニングを8箇所に設定し、遺構の検出状況にあわせて順次拡張を行った。

(5) 調査のまとめ

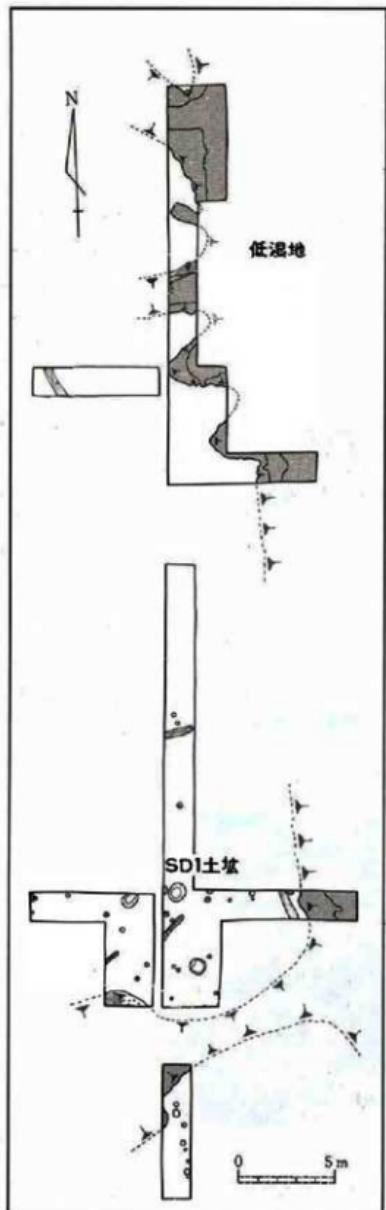
調査の結果、当該地の旧地形は南西部を除く大部分が、低湿地として周囲より一段低い地形であったことを確



調査区位置図



SD 1 土塙完掘状況



調査区西側平面図

認した。そして調査区北西部では、この低湿地に流れ込んでいたと思われる小規模な河川跡を確認した。調査区南西部においては、地表面から20cm程の深さが地山面であり、ここで小溝跡、土塙、小柱穴等を検出した。しかし、造構の分布は希薄であり、小柱穴も明確に建物として組み合うものは確認できなかった。これらの造構のうち、南北に細長く掘り込んだトレンチの南半部で検出したSD1土塙は、底面に須恵器の壺が口縁部を上にして据えられていたものである。土塙の平面形はやや細長い円形を呈し、長径96cm、短径77cm、深さは65cmを計る。断面形をみると壁は比較的急角度で立ち上がり、中頃で段を形成する。この段の上部では径が一まわり大きくなる。埋土は大きく2層に分けられ下層が粘土と砂質土の互層で自然的な堆積をみせるのに対して、上層は人為的に埋め戻したような様相を示す。底面に据えられた須恵器壺は、最大径を体部上半にもち、ほぼ球形を呈するものである。底部が大きく穿孔され、体部下半にも4カ所に小孔が穿たれている。これらは断面観察から、すべて焼成後にあけられたものと考えられる。この土塙の性格については、現時点では不明といわざるを得ないが、本調査区周辺では井戸跡の底面に底板をはずした大形の曲物を据え、その側板の数カ所を穿孔している例がいくつかみられることから、あるいはこの須恵器壺も同様に水溜の用途として利用された可能性も考えられる。ちなみに調査時においても、底面付近まで掘り込んだ段階で水が湧き出してきていた。時期については、出土遺物の特徴から大きく平安時代に属すると考えられる。

Ⅱ 事業報告

1. 展示

(1) 今年度の展示について

今年度の展示は「速報・発掘された遺跡展－平成2年度の成果報告－」（以下、速報展と称す）と、第5回企画展「中世の多賀城」を開催した。

速報展は、前年度の発掘調査成果を速早く紹介し、身近な埋蔵文化財に対する認識と理解を深めてもらう目的で行っており、今回で3回目をむかえる。

企画展は、初めて中世をとりあげた。ここ数年市内の新田遺跡の発掘によって明らかにされた中世の様子には目を見張るものがある。文献史料からはうかがうことのできなかった生々しい生活の実態が姿を表わし、東北の中世史に新たな1ページを加えたといつても過言ではない。

展示ではこの新田遺跡の成果を中心に文献史料もふまえながら、多賀城が機能を失った後の、鎌倉・室町時代の市内の様子を紹介した。

(2) 「速報・発掘された遺跡展－平成2年度の成果報告－」

期間：平成3年4月27日～6月2日

① 展示の趣旨

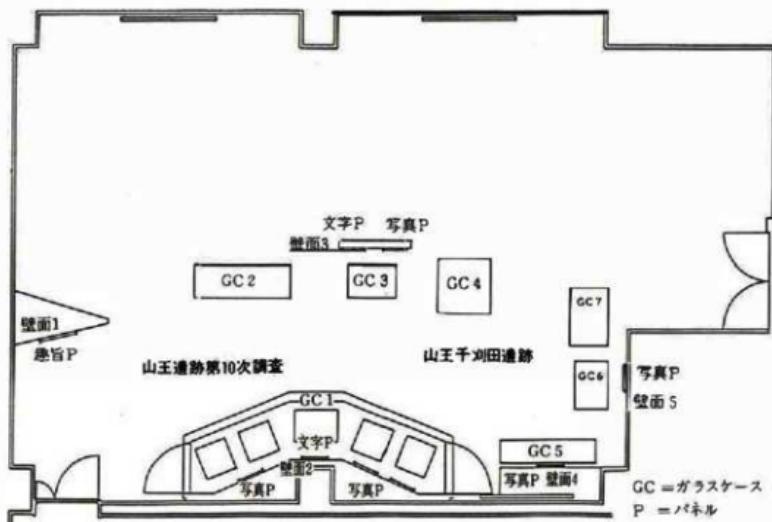
市内では毎年、宅地造成、道路建設等のため数箇所で発掘調査が行われている。その件数は増す一方で、それに伴い貴重な遺跡が姿を消していくのが現状である。そこで、前年度に発掘された遺跡の中から主なものを紹介し、出土遺物を展示することによって、我々のごく身近なところにある地元に根ざした歴史に目を向けてもらいたいという目的で、このような企画を行っている。このような試みを継続させていくことによって、遺跡に対する認識が高まり、引いては遺跡の保護、保存にも強い関心を示していただけるのではないかと考えている。

② 展示の内容

平成2年度の調査から山王千刈田遺跡（山王遺跡第9次調査）と山王遺跡第10次調査の成果を報告した。

<山王千刈田遺跡>

陸前山王駅の西隣を対象に行われ、四面廻付建物跡、井戸跡などが発見された。さらに「右大臣殿 銭馬收文」と書かれた題簽軸木簡をはじめ灰釉・綠釉陶器、中国産陶磁器、立体人形等の遺物が出土している。木簡は都にいる右大臣と陸奥国とのかかわりを示しており、遺構、遺物や多賀城との位置関係などから、ここは「国司館」なかんづく「国守館」ではないかと推定された。時期は10世紀前半頃と考えられる。



「速報・発掘された遺跡展」展示平面図

資料は高級官僚をうかがわせる陶磁器類、ごく日常的な生活の道具類（木製品、土器等）、そして木簡と性格別に展示した。

＜山王塚跡第10次調査＞

仙塩道路関連の調査で、インターチェンジ部分のうち9,000m²という広い面積を発掘した。ここからは古墳時代中期のゴミ捨て場、古代の道路跡・建物跡等が発見された。古墳時代のゴミ捨て場は、調査区をほぼ東西に横切る自然堤防と、その南北に広がる低湿地との境目にあたる場所で見つかっており、おそらくは自然堤防上に作られたであろうムラに住んだ人々が、ムラはずれの斜面にゴミを捨てたのであろう。この様な発見は全国でも珍しい。



山王千刈田塚跡出土木簡

また、古代の道路の方向、建物の配置からは、多賀城周辺の都市計画の様子が一段と明らかになった。ここからは漆紙文書が出土しているが、漆の付着した土器、さらに漆塗の作業を記したかと思われる木簡の発見と相まって、漆工房の存在が想定されている。漆紙文書は2点出土した。一面に戸口損益帳、その裏面に「百済王」と記された一連の断簡と、もう1点は天平宝字7年の具注曆である。

資料は時期別に展示し、古代の漆関係のものは総合的に理解できるようにまとめた。

③ まとめ

これまでの速報展と違い、今回は遺構、出土遺物の内容・組合せから調査区内における遺構の性格を推定できるものだったので、展示としては極めて理解しやすかったのではないかと思う。いかに資料の羅列に終わらせないかが、今後とも問われる。

(3) 第5回企画展「中世の多賀城—国府の地に生きた武士（もののふ）たちー」

期間：平成3年10月15日～平成4年1月19日

① 展示の趣旨

ここ数年、中世の考古学が全国的に脚光を浴びている。武士による政権の樹立、相次ぐ戦乱と、混沌とした時代の様相は、これまでにも文献史料からさまざまに語られてきた。しかし、武士や庶民の日常生活の様子については文献に残されることは稀である。その実態は発掘調査で初めて明らかにされたわけで、これもまた近年著しく進展した「絵巻物から歴史を読む」方法とともに、これまでの中世像を大きく変えようとしている。

市内でも新田遺跡でまとまった中世の遺構が発見され、大溝で囲まれた武士の屋敷が姿を現した。屋敷の中からは豊富な生活の道具が出土しており、地方武士の生活を彷彿させる。

これまで、「モノ」で語られることのなかつた中世の世界を再現できればと考えた。

② 展示の内容

展示では発掘で得られた考古資料を中心に、中世の多賀城周辺の様



展示風景〈導入部、コーナー3〉

子を具体的に記している「留守家文書」なども駆使しながら、鎌倉から室町時代に至る武士を中心とした生活の一端を、つぎの4つのコーナーに分けて紹介した。

〈導入〉

時代背景、全国の動きとの関連をつかんでもらうために年表を用

意した。また、多賀城周辺の中世遺跡の分布の様子を紹介し、今回の展示の中心となる新田遺跡の大まかな説明を行い、さらに梅瓶の変形品を展示し、中世へのいざないとした。

〔資料〕梅瓶（個人蔵、新田遺跡出土破片）

〔パネル〕年表、多賀城及び周辺地域の中世遺跡（分布図）、新田遺跡遺構配置図

〈コーナー1〉 くらしーときには土地を開き、物資を動かす—

当時の武士たちは、農業経営者としての側面ももっていたといわれ、事実古文書にも新田開発を示す絵図が残っている。また、発掘調査においては当時の高級品である陶磁器等が数多く出土し、それらは東海地方やあるいは遠く中国からの輸入品であることがわかつ



展示風景 <武士の屋敷台所復元>



展示風景 <コーナー1>

ている。これらのこととパネルを使って説明し、合わせて様々な日常の道具を展示して当時の人々の様子を紹介する。

〔資料〕中国産陶磁器・国内産陶磁器・漆器・木製品・鏡・硯・茶臼・古銭など（新田遺跡）

陶器（多高田窯跡、熊狩A窯跡、熊野堂大館遺跡）、大妻・カワラケ（多賀城跡）

〔パネル〕新田遺跡発掘風景・遺構・遺物発見状況（写真）、中世の水田跡（富沢遺跡、写

眞）岩切分荒野七町絵図（留守家文書、写真）、市場の様子—備前国福岡市—

（一遍上人絵伝、写真）、新田遺跡に運びこまれた陶磁器の主な産地（分布図）

＜コーナー2＞ いのりーときには神仏と対話する—

現代に比べ中世の社会では、信仰が日常生活に強くむすびついていた。ここでは、当時の供養碑である板碑をパネルで復元し、また中世寺院の存在を裏付ける資料や、塔婆などの折りの道具を展示する。

〔資料〕

板碑破片

墨書きのある札

舟形、塔婆

（新田遺跡）

鬼瓦、平瓦

軒丸瓦、軒平瓦

（東光寺遺跡）

〔パネル〕

供養碑と中世の

遺跡（分布図）

石窟仏（東光寺、写真）



展示風景 <コーナー2>

嘉暦2年の板碑・元応元年の板碑（写真）

＜コーナー3＞ 家ーときには命をまとに、家名を守る—

中世という世の中は、また、争いの時代でもあった。争いには周辺の領主との合戦もあれば、土地相続などに端を発した一族、家臣などとの内部抗争もあった。ここでは、中世の多賀城を代表する領主である留守氏を中心とりあげ、この家に伝わった相続関係の古文書や家臣団の編成をとおして、領内經營に苦心した領主の姿を浮き彫りにする。

〔資料〕陶器・カワラケ等（新田遺跡）、祖・様（民俗資料）、武士の屋敷の台所（部分復元）、

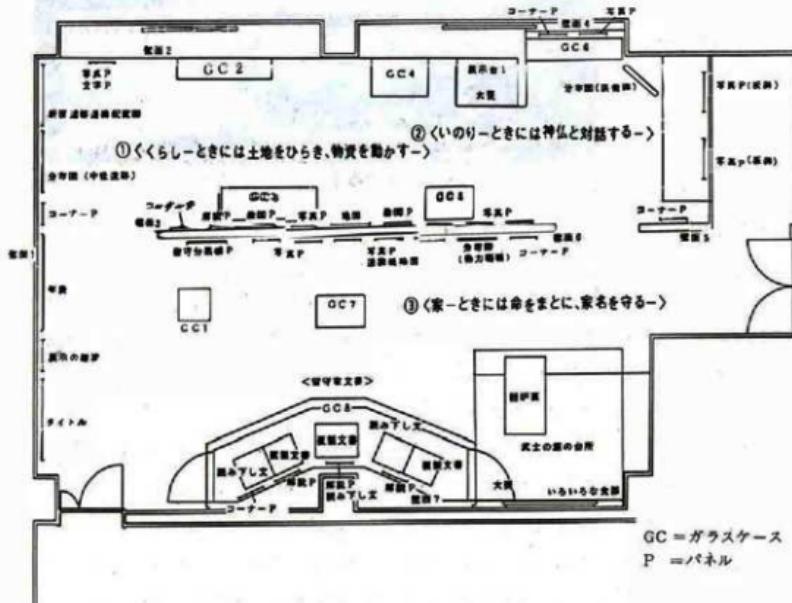
金属製品（新田遺跡）、關東下知状（留守家文書、複製）、留守家廣譲状（留守家文書、複製）、將軍家政所下文（留守家文書、複製）

〔パネル〕岩切城跡（写真）、利府城跡（写真）、八幡館跡（写真）、館前遺跡（写真）、矢作ヶ館跡（写真）、多賀城及び周辺領主の勢力範囲推定図（地図）、留守氏家臣団（留守分限帳、表）

③まとめ

康治2年(1143)、「多賀国府」という名前が初めて史料に登場する。奥州藤原氏を攻めた源頼朝が立ち寄るなど中世における陸奥国の中心的役割を果たしていたようである。かつては、古代の多賀城がやがて名称を変えて多賀国府となり、その所在地も多賀城市市川であろうと考えられていた。しかし、築地で囲まれたいわゆる方八町の中には中世の多賀国府らしきものは存在しないであろうということが、発掘の進んだ現在の率直な考え方のようである。

多賀国府はどこにあったのか。中世の多賀城を考える上でも、また、古代から中世への変遷をたどっていくうえでも重要なポイントになるのだが、所在地は今のところつかめない。しかし全く手がかりがないかといえば、そうとも言えない。今回、展示の中心に据えた新田遺跡が何らかの形で多賀国府にかかわった施設である可能性が高いのである。中世の国府がどのような形をしていたのか、考古学的に検証できていない今、その解明は手さぐりの状態であるが、新田遺跡やその周辺の中世遺跡の発掘調査を通して、今後、多賀国府の実態に迫ることが必ずやできるであろう。そのためにも、長い調査研究、そして折に触れてそれらの成果の展示公開が必要と思われる。



企画展「中世の多賀城」展示平面図

2. 善き活動

(1) 資料の貸し出し

依頼機関	目的	貸出期間	資料名
多賀城市立多賀城東小学校	6学年社会科教材	3. 6.25 ~ 6.27	すり鉢、天目茶碗、下駄、カワラケ、大甕破片、青磁破片(新田遺跡)
日本考古学協会宮城・仙台大会実行委員会	日本考古学協会宮城・仙台大会「ミニ展示」	3.11.18 ~ 11.25	灰釉陶器杯、碗、段皿、耳皿、破片、綠釉陶器碗、三足盤、耳皿、破片、褐釉陶器水注、青白磁水注、碗、白磁碗、木筒(山王遺跡)
宮城県教育委員会	よみがえる多賀城	3.12.18 ~ 4. 1.31	「観音寺」陶土器、木簡、瓦類陶器碗、耳皿、中国産陶磁器、手斧(山王遺跡)、下駄、木製盤、人面彫書土器(市川橋遺跡)、漆容器と蓋紙(レプリカ)
仙台市博物館	中世街道を行く	4. 2.15 ~ 4. 5	白磁梅瓶破片、天目茶碗、花瓶、深皿、おろし皿、碗、皿、入子、すり鉢、物忌札、塔婆、舟形、墨書き板片、板磚破片、小刀、鞘尻金具、小柄、笄、鎌、斧、釘、はさみ、毛抜き、巒、温石、硯、櫛、古錢、茶臼、漆器、曲物、自在鉤、木製盤、砧、草履の芯、下駄、杓子、こね鉢、大甕、カワラケ、遺構パネル、写真パネル

(2) 館外における普及活動

期間	内 容	対象	依頼機関	担当
3.7.18	山王遺跡現場見学	大代東部婦人会	市秘書広報課	千葉
7.23~25	発掘調査体験学習	郷土史研究部	多賀城市立第二中学校	*
7.24	山王遺跡現場見学	新規・転入教職員	市学校教育課	*
7.25	史跡案内	原町市高平老人会	原町市高平公民館	滝川
8.27	山王遺跡現場見学	共同研究メンバーアーク	国立歴史民俗博物館	千葉
8.29	史跡案内	取手市議会	市議会事務局	滝川
9. 3	史跡案内	福島県白沢町公民館	福島県白沢町公民館	丸山
9.26	山王遺跡現場見学	魏ヶ谷衛生班長、下馬西社会振興員	市秘書広報課	千葉
10.21	企画展「中世の多賀城」紹介	まるまる宮城	NHK	石本
10.24	史跡案内	市民講座受講者	山王地区公民館	滝川
11. 7	山王遺跡現場見学	歴史クラブ	多賀城市立城南小学校	千葉
11.26	史跡案内	宮城県市長会広報部会研究会	市秘書広報課	滝川
4.3.25	史跡案内	バレエ育成会	市秘書広報課	*

(3) 講演会などへの協力

期 間	題 目	会 の 名 称	主 催 団 体	担 当
3.11. 9	屋敷の中の生活	放送による東北大学講座	東北大学教育学部付属大学教育開放センター	千葉
11.26	奥のはそ道とみちのく文学の旅	宮城県市長会広報部会研究会	市秘書広報課	滝川
4. 2.25	城外のようす	史跡案内ボランティア養成講座	市社会教育課	石本

(4) 現地説明会の開催

「山王遺跡第12次調査について」

平成3年11月30日 担当者 千葉

III 事務報告

(1) 平成3年度展示室入館者数

月	一 般	高 校	小・中	招 待 券	免 除	観 察	その 他	合計(人)	開館日数
4	124	0	169	0	60	9	13	375	25
5	325	6	68	24	154	60	69	684	27
6	292	2	151	5	0	49	13	453	26
7	337	8	29	0	190	67	2	633	26
8	187	7	76	1	38	26	24	359	23
9	246	1	68	1	0	52	5	373	25
10	346	5	72	3	0	118	191	735	26
11	272	2	170	5	12	124	165	750	26
12	113	1	35	7	0	40	10	206	23
1	144	1	47	5	20	5	3	226	22
2	92	2	21	4	0	44	16	179	24
3	128	4	49	3	33	42	6	265	26
合計	2,546	39	955	38	507	636	517	5,238	299

(2) 平成3年度予算概要

(単位:千円)

	事 業 名	歳出予算額	摘要
1	埋蔵文化財緊急調査に要する経費	6,166	山王遺跡ほか発掘調査費(国庫補助事業)
2	史跡のまち発掘調査に要する経費	6,351	試掘調査費、発掘出土遺物整理費、年報作成費
3	埋文センター普及、啓蒙に要する経費	5,034	埋文センター運営諸経費、企画展等展示開催費
4	鉄製、木製遺物の保存処理に要する経費	3,007	発掘出土遺物保存処理費(国庫補助事業)
5	発掘調査受託事業に要する経費	53,180	開発行為に伴う発掘調査費
計		73,738	

多賀城市埋蔵文化財調査センター職員録

(平成4年3月現在)

所長	斎藤	一司
主査	赤坂	みゑ子
研究員	滝口	卓英
◆	石川	俊孝
◆	千葉	弥敬
◆	石本	利
◆	相沢	清
嘱託	滝川	ちかこ
◆	丸山	佳子

多賀城市文化財調査報告書第33集

年報 6

平成5年3月1日 発行

編集 多賀城市埋蔵文化財調査センター
発行 多賀城市中央二丁目27番1号
電話 (022) 368-0134

印刷 伊藤印刷所
多賀城市下馬五丁目1-7
電話 (022) 362-0805
